

5. 学部における共通教育科目・学部・学科ごとの分析と課題

(学生による授業評価アンケート結果に対する全体的解釈等)

(1) 共通教育科目

1) 共通教育科目を全体的にみた現状の説明

授業への満足度をみると(Q13)、3.3と特に悪くはないものの、満足していない学生(「どちらかと言えばそう思わない」+「そう思わない」)が15%弱存在する。その要因として考えられることは、教材や成績評価の妥当性、教員の対応の仕方や熱意の有無などであるが、それらに対応するQ6~12の結果をみる限り、とりたてて悪いものはない。ただし満足度の低い学生を取り出したデータをみると、授業の進め方(Q12)の評価がやや低い。Q14~16の平均値が相対的に低く、むしろ学生自身の授業に向き合う姿勢のほうにやや問題があるといえる。なかでもシラバスをよく読んでいない学生の割合が1/3(33.1%)にのぼる。共通教育科目には選択の余地のない必修科目が多いことも、一因ではないかと推察される。

2) 長所と改善点

出席状況をみると、4回以上欠席した者が4.4%存在するものの、約半数(47.5%)は全回出席している。総じて出席を促すことはまずまずできていると思われる。4回以上欠席した者のその原因の傾向はこのデータからは読み取れず、個々の学生や授業の状況によるとしかいえない。教員の熱意(Q11)を感じないとする学生は1割未満にとどまり(7.7%)、全体的に熱心に授業を運営していると評価されている。個別にみれば、教材や質問への対応、授業の進め方など、教員の授業運営の問題が潜在するものとみられるが、本調査データからは分析不能である。むしろ、学生の履修態度、特に上述したシラバスの活用の点で改善の余地があると考えられる。

3) 改善の方策

シラバスを学生に読ませるには履修指導が基本となるが、日常の授業においても、シラバス表記にしたがって、授業冒頭で当該授業の内容や目標を説明したり、終わりに次回の予告をするなど、シラバスを話題に出すようにして、学生の意識づけを行うことなどが望まれる。

さらに上述したように、学生の反応を見ながらの授業運営ができていない科目があることが、学生の満足度評価に関わっていることから、すべての教員が、学生の理解の度合いを測りながら授業をすすめることを心掛ける必要がある。

4) 今後の課題

2010(平成22)年度と比較すると、提示された情報を見る限りデータの傾向にはほとんど差はない。アンケート回収率が69.6%から74.7%へと5ポイント増えて、授業評価アンケートそのものはいっそう定着した感はあるが、そもそも多様な共通教育科目全体の集計結果をみても、そこから読み取れるものはわずかである。各科目の

ることができる。

改善すべき点としては、授業の内容を理解することや、授業に集中し、刺激を受け、視野を広げるということに満足できていない学生がいることが挙げられる。この背景には、学生の取り組みの熱心さや習熟度にばらつきがあることが考えられる。後期から意欲や集中力が低下していく傾向が見られるのも、同様である。自ら授業に関心を持ち、内容を消化し、視野を広げていくことができるようにするため、それぞれの学生の興味・関心・習熟度に見合った授業の進め方、授業内容の工夫などが必要である。

また、シラバスが有効に活用されておらず、学生は科目の目標や内容をよく理解しないまま授業に臨んでいる。自主学習は、昨年度より向上したものの、なお全学平均を下回っており、自主学習を促すことも改善すべき点である。

3) 改善の方策

各授業の特性や目的に応じて、学生に興味や関心を抱かせ、刺激を与えうるような授業の内容と方法を具体的に考える必要がある。

また、授業のあり方だけでなく、心理学を学ぶ上で必要とされる基礎学力を高めるための取り組みが必要である。そのための方策としては、学生の習熟度に合わせたクラス編成や授業内容の工夫・指導が必要ではないかと思われる。

シラバスの活用については、授業内容の意味と目的を理解するために必要であること、予習・復習の目安にもなることなど、その必要性を年度の初めに各授業で学生に説明し、よく理解させるよう努める。

4) 今後の課題

学生が学問としての心理学の面白さ、重要性、実用性をよく理解し、授業から充実感や満足感を得られるよう、さらなる工夫を心がけることが必要である。授業の内容を理解できることは、学生が授業に対して関心を持てるかどうかを左右する重要な要因であるので、学生の個人差を考慮したきめ細やかな指導が求められる。

また、授業形態や受講者数の差異も考慮し、個々の授業改善に役立つ授業評価の方法について、検討が必要である。

文責：上田 恵津子（心理学部長）